

認定監理技師制度への 期待と要望 —その3—

論説

■ 認定総合監理検査技師カリキュラムの内容

あり方報告書によれば認定総合監理検査技師制度のカリキュラムは以下の通りです。

● 初級監理臨床検査技師

1. 基礎知識
 - 1.1 医の倫理 (15 時間・1 単位)
 - 1.2 経営管理概論 (30 時間・2 単位)
 - 1.3 経営者論 (45 時間・3 単位)
 - 1.4 医療行政と医療制度 (30 時間・2 単位)
 - 1.5 関連法規 (30 時間・2 単位)
 - 1.6 医療関連指針・時事問題 (30 時間・2 単位)
2. 医療安全対策 (60 時間・4 単位)
 - 2.1 検査室労働安全衛生管理指針
 - 2.2 検査室医療安全管理指針
 - 2.3 医療機器管理に関する安全管理指針
 - 2.4 危機管理指針
3. 品質マネジメントシステム構築 (60 時間・4 単位)
 - 3.1 国際規格
 - 3.2 医療機能評価
 - 3.3 マネジメントシステムの構築
 - 3.4 ISO 9001
 - 3.5 ISO 15189
 - 3.6 内部監査(ISO19011)

● 上級監理臨床検査技師

- 1 構造化分析 (30 時間・2 単位)
- 2 マーケティング論 (30 時間・2 単位)
- 3 経営戦略論 (60 時間・4 単位)
- 4 情報化戦略論 (60 時間・4 単位)
- 5 会計学 (45 時間・3 単位)
- 6 運用管理 (45 時間・3 単位)
- 7 ミクロ経済学 (60 時間・4 単位)
- 8 臨床検査経営特論 (120 時間・8 単位)
 - 1 医療政策学
 - 2 臨床検査経営戦略策定
 - 3 修了論文

このカリキュラムを一瞥して気付くことは、初級科目の大半は誰がレクチャーしてもほぼ同じ講義内容になるのに反し、上級のそれは講師によって講義内容が大きく異なるという点です。初級の講座は従来とさほど変わらない心構え、換言すれば、素直な気持ちで教室に臨んでも事足りませんが、上級の講座は批判的に受講できる力量がなければなりません。

また、広範な教養科目もありませんので、一定水準の一般教養を具備した人材を選抜するか、予科のような所で研修するなどの方策も考慮する必要がありそうです。教養科目に関連して、経営史、医療史などの講座が見当たらないことも気になります。

さらに、社会人としての基礎力を身に付けるコースも別途設ける必要があります。

何故なら、「反応力」、「愛嬌力」、「文脈理解力」、「人脈開拓力」、「委任力」、「相談力」、「教授力」などの対人能力、「楽天力」、「継続学習力」などの対自己能力、「目標発見力」、「専門構築力」などの対課題能力、総合能力としての「仲介調整力」は、その能力を身に付けるに相応しい年齢(能力開発年齢=旬の年代)があるからです。

■ 教養は質の高さの裏打ち

「急行の停まる駅に駅弁あり、駅弁のあるところに新制大学あり」、戦後、雨後の筍のように急増した大学を揶揄した評論家・大宅壮一の言です。

戦後教育は平等主義(実は悪平等)で、教育とは知識を詰め込むことだと考えられ、何もかも丸暗記することには長けたが、論理的思考はさっぱり、従って、教育の場で意思決定能力が醸成されることは滅多にありませんでした。平等主義が最も実現しやすい状態は全員が白痴化することだということは銘記すべきことです。

目まぐるしく変化する社会環境の中で、私たちに今必要とされているのは、記憶力に優れ知識量に富んだ所謂博学なヒトではなく、自ら課題・問題を設定し、それを解明する論理を考え出す能力を持ち、自ら打ち立てた仮説を見事に立証してみせる人間です。そのような意欲を持った人間の集まりを教育する小規模な仕組みを作り、真の教養を身に付けた人材を輩出したいものです。何故、小規模でなければならないのかについては後述します。

科学の進歩の陰には、常に個人の興味と多数の幸福との葛藤があります。どこで折り合いをつけるか、絶妙のさじ加減ができる人材が不可欠であり、判断力が問われるところです。判断もろくにできない輩に決断など望むべくもありません。

判断を他者に求めて責任を回避する者が増殖しています。なにもかもマニュアルに頼り丸暗記をする、理念もヘチマもないので自身の哲学が形成されず、哲学がないので胆力も持ち得ず、従って責任を回避するのだと思われます。このような上司のいる職場は悲惨です。

1810 年に世界最古の大学であるベルリン大学が設立されました。「ドイツ観念論哲学を主として教え、実践などはどうでもよい。哲学とか宇宙とか人生について深く考え、孤独の旅を経験し孤独の中で勉強した人間が将来行政官なり政治家あるいは弁護士、プロフェッサーになって一国を支えるべきだ」というのが創設者フンボルトの考えでした。

わが国も真似をして帝国大学を作ったわけですが、イギリスの産業革命から 100 年も遅れており、世界的にみて後進国であったため、デカンショだけでは諸外国に追いつけない。そこで、世界で初めて工学部を東京帝国大学に設置し殖産興業を進め、やがて教養部分は高等学校に委ねられました。

しかし、戦後の学制改革で旧制高校も大学へと昇格し、教養課程は新制大学の前期 2 年間に移行しましたが、専門課程に侵食され続け一般教育科目と名を変え、遂に教養科目は有名無実となってしまいました。この傾向は自然科学系統学部にも顕著で、その結果、私たちは無教養になってしまったのです。

■ 質を高めるには小規模の仕組みが必須

かつてこの国は、「経済一流・政治は五流」といわれたものです。ところが、昨今は周知の通り政治も経済も五流以下になり、学力の低下は留まる所を知らず、民度の低さは目を覆うばかりです。

大学・短大への進学率は年々増加の一途を辿り、1955 年には 10.1%にすぎなかったものが 2007 年には 53.7%となり、わが国は、国民の過半は大卒という文化的国家へと変貌しました。然るに、民度は上がるどころか下がってしまいました。何故か?

答えは簡単明瞭、大学の数が多過ぎるのです。総定員が多いなかで定員割れを恐れて入学を許可した結果、基本的な学力が無いばかりか、向上心や学ぶ意欲の無い者まで学生となってしまったからです。

生まれた者のうち 54%の者が、まずまず理解し得るほどには大学の教育内容はやさしくあってはならないのです。

総合監理技師の証書に価値を与える意味においても、少数精鋭の教育体系を構築してもらいたいものです。

【金子健史】